やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

第一章　なぜ屋久島なのか

■世界自然遺産登録のなぜ

縄文杉に象徴される屋久島の自然。縄文杉を守るために世界自然遺産に登録された訳ではない。１９９３年屋久島は白神山地とともに日本で初めて世界自然遺産に登録される。１９９２年、日本が世界遺産条約してすぐのことであるがユネスコが世界遺産条約を採択したのは１９７２年。日本の時代背景として高度経済成長の真只中。日本社会では自然保護に対して関心は薄く意識に大きな遅れがあったと考えられる。その２年前、屋久島では国有林の屋久杉伐採事

業の終焉を迎えている。林業などの第一次産業が廃れていく時代でもある。伐採事業が終わることでひとつの節目を迎え、屋久島の価値というものを見直すべき時代がやってきたのかもしれないが、当時の屋久島では観光産業の占める割合はわずか６％だったと言われている。屋久島が世界自然遺産に登録されて１０数年が経ち現在では観光産業は６０％を超えると言われているが間接的な事業者も含めるとかなりの割合になるとの見解もある。現在の屋久島を支える観光の目玉である世界遺産。

屋久島の世界遺産としての価値たるものは『世界的に特異な樹齢数千年のヤクスギをはじめ、多くの固有種や絶滅のおそれのある動植物などを含む生物相を有するとともに、海岸部から亜高山帯に及ぶ植生の典型的な垂直分布が見られるなど、特異な生態系とすぐれた自然景観を有している地域である。以上のことから「陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や生物群集の進化発展において重要な進行中の生態学的生物学的過程を代表する顕著な見本である。」とともに、「類例を見ない自然の美しさ、あるいは美的重要性を持ったすぐれた自然現象または地域を包含する」と判断され世界遺産一覧表に登録された』と記されている。離島であったことと国有林の割合が非常に高いことは伐採事業の撤退後に屋久島の開発を推し進められなかった大きな要因となり、結果今の屋久島の自然があると言えるが江戸時代に年貢を納めるための伐採から始まり昭和４０年代まで続いた屋久杉伐採の歴史。その時代背景を経た今の屋久島の森は決して手つかずの森ではない。人々が山の神を敬いながら自然とともに暮らしてきた歴史の刻まれた森である。人と自然がともに生きてきた証が森に残り、また原生の森と伐採の歴史からの再生の森が見られる。現在、屋久杉の生木の伐採は禁止されており、縄文杉などの著名木については樹勢回復措置が行われている。また観光産業の発展による入山者の増加、環境負荷など新たな問題も出てきているが、世界遺産登録による課題と現状については、また後にふれたい。

■屋久島移住のなぜ

大阪で生まれ育った私が屋久島に出会ったのは二十歳の時である。奇しくも世界自然遺産に登録される半年前の１９９３年６月のこと。それまでの私にとって屋久島は教科書に掲載されていた縄文杉と、日本一のウミガメ産卵地であること、ということしか知らない。当時動物園の飼育員として勤

めていた父がニホンザルの生息の南限地である屋久島にその生態などを観察に行くという。時期は屋久島でのウミガメ産卵最盛期。旅費は後からバイトして半分は返済するから何はともあれ連れて行けと懇願。それが私の屋久島初上陸となる。

屋久島初上陸から１０年前の小学５年生の夏に和歌山のみなべ町で初めてウミガメの産卵を観察した私は、その生き物に心を奪われてしまっている。その後も毎年夏になればウミガメに会いに出かけていた私にとって屋久島は憧れの地。父と一緒にサルを追い、カメを追い、山を歩いて過ごした。一週間の屋久島滞在で私は「大学を卒業したら屋久島に住みたい。」と自分の生きてゆく場所を決めている。なぜ屋久島だったのかと聞かれれば「海があって山があって川がある。そして自然とともに生きる人々の暮らしがある。ニッポンの景色がここにあると感じたから」生まれ育った大阪など都会ではなく、日本のどこか自然の豊かな場所で仕事をしたいと考えてはいたが、どこで生きてゆくか悩んでいた時期だった。初めての屋久島から２年後、自分の決意がどれだけ本気なのか自ら問いかけるように今度はひとりで屋久島へと向かう。一ヶ月間ウミガメ生態調査ボランティアに参加しながら屋久島での仕事や住まいなどを探した大学生活最後の夏。そして当時の屋久島ではまだまだ認知度の低かったネイチャーガ

イドとして採用が決まる。その仕事は日本の自然の素晴らしさと、そこに生きる生物の現実をたくさんの人と一緒に考えてゆきたい、と思い就きたいと望んでいた仕事である。

縄文杉が今生きる意味や、ウミガメが生まれてすぐに海へまっすぐ向かう意味。
私たち人間が知っていることは極わずか。
でも私たち人間が出来ることはまだまだたくさんある。一緒に考えることから始めてみませんか、そう問いかけることで相手の心に伝わることが何かひとつあれば嬉しい。
人は知ることで優しくなれるから。その優しさから溢れる笑顔がまた次の人へ伝えられ拡がってゆくことで変わるものがあるのではないかと信じている。

人間の、自然の、何が本来の姿なのか、それを屋久島で考えながら生きていきたいと思い辿り着いた屋久島であるが、移住したばかりの頃は屋久島で３年やってみて、もし他に行きたいところが出てきたらそれはまたその時に考えれば良いと思っていた。しかし現実は認めてもらえるのに３年はかかる。３年経って独立し、もうちょっと頑張ってみようと思う。５年経てば屋久島に骨を埋めたいと思うようになる。１０年経って念願の自分の家を持つ。

気が付けばやくしまに暮らして１５年。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

第二章　特別か個別か

■世界遺産だから特別なの？

屋久島が世界自然遺産登録された背景は第一章で記してありますが、では世界遺産とは特別なものなのだろうか。
もちろん、登録をされた理由や意味はあり、それらが失われてしまったり変わってしまえば登録の抹消もあり得るが、しかしながら、世界遺産になったのだからこうしなければいけない、ではない。世界遺産になった屋久島の自然、またその意味をどう守って残してゆくのか、が今を生きる私たちの使命である。このような歴史背景の中でこうして守られてきた今があるから世界遺産なのだと、言い伝え残してゆくことこそが大切な役割なのである。

また世界遺産登録の際には課題というものもちゃんと与えられており、数年後にその課題に取り組んでいるのか、また変わってしまっていないか、ちゃんと守られているのか調査も行われている。
そこで守っていくのはあくまでもその国であり、そしてその場所に暮らす人々であり、伝え続ける心も残し後世に繋いでゆくことが必要なのである。

縄文杉をシンボルとし象徴的に扱っていると思われがちな屋久島の観光。もちろんそれも否めないが、あくまでもそれは入口であり、きっかけであると私は考えている。これだけはっきりとしたランドマークがある屋久島の観光。それをメリットとして最大限に活かしながらもその道の続きを示すことが出来るかどうかが私の使命。

縄文杉が世界遺産なのではない。
様々な時代背景のもと生き残った縄文杉という一本の木が教えてくれる屋久島の森。縄文杉という一本の木で森は作れない。互いに支えられ守られて森はある。縄文杉に着生する一本の木も、先日倒れた翁杉も森の中では繋がっている。

■障害があるから特別なの？

私は右耳が聞こえない。だから学校の教室程度の部屋ではマイクなしでは聞こえないし右からの音や声は聞こえてこない。
そうすると当然、時と場合に応じて周りの方々にその旨を伝え力を借りることになる。それは私にとって背が低いから高いところにあるものに手が届かないことと同じだと思っている。もちろん、届かないのは見てわかるけれど聞こえていないのは言わないとわかってもらえない。何度も聞き返し相手を怒らせることもあるし、気付かずに不愉快な思いをさせて迷惑をかけることだって多々ある。ただそれは私にとってあくまでも苦手なことなのだと思っているのである。それをちゃんと伝えられず嫌な思いをさせて申し訳ないことをしたと反省をする。聞こえないことが弱点なのではなく、そのことをちゃんと伝えられないことが弱点。何十年もそんな日々を過ごしても成長していないのかもしれないが。
私の育った小学校は障害者が同級生と出来るだけ一緒に過ごし学べるようにすることにとても積極的であり、また当時の私の担任は子供たちにどうすれば良いか考えさせ、話し合いをする時間を幾度となく与えてくれた。
今思えば２０数年前のこの時間が今の自分の考え方に大きな影響を及ぼしている。一人ひとりの個性を大切にすることと特別視することが必ずしも同じではないということが自然に対しても人に対しても通じることであり、私にとって最も大切なことなのである。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

第三章　　離島の暮らし

「いつも温かい南の島だから、自給自足でやっていけそう。なんと言っても屋久島は水が豊富だから、畑でお野菜とか作って、海で魚釣ったりしてのんびり暮らしていけそう。」というイメージを持たれることが多い。また、そう期待して移住して来る人もいる。果たしてどうなのか？

■四季

春、屋久島は雨に包まれる。

ここでまた「え、だって屋久島っていつも雨でしょ？」と思われることでしょう。林芙美子が小説「浮雲」の中で屋久島は月に３５日雨が降ると表現した島である。確かに年間雨量は大阪や東京に比べて４～５倍。桁外れの雨が降る屋久島ではあるが、春の雨は日本の光景。天気予報士がニュースで伝えることがスギ花粉の話から桜前線の話に変わる。そしてどこかの公園の桜の木の下で、「ここの桜は今週末が満開で見頃となりそうですが、気になるお天気は...」などと話していることが多い。桜の時期は三寒四温、ひと雨ごとに温かくなる季節なのである。そして屋久島の桜は、ソメイヨシノは学校や役場などに植えられており、卒業式の頃に満開を迎える。山を彩る桜はヤマザクラ。

新緑とともに拡がるヤマザクラの開花。ゴザとビールではなく、カメラとおにぎり持ってトレッキングとともに楽しめます。

梅雨、もちろん雨が降り続く。山も森も海も浜も、その恵みを存分にうけて育まれる。
屋久島がとても美しい季節ではあるが、あまりに降り続く雨はさすがに憂鬱になる。

夏、期待通りの南の島を楽しめる。海も川も泳ぐ魚が透き通る。だからと言って朝から一日中海や川で泳いでい

たら焦げる。島の人は夕方頃から泳ぐ。灼熱の太陽を遮るもののなく浴び続ければ体力は相当消耗するし、過度な日焼けは危険なので要注意。しかし、こちらも毎日ニュースでお届けされるような猛暑や熱帯夜にはならない。日中の最高気温も３２℃くらいのもので、岳降ろしと呼ばれる山からの風が心地好く、コンクリートやビルではなく本当の森に囲まれている。そして夜は満天の星空と天の川を楽しめる。
秋、あっという間に通り過ぎる。モミジがなく紅葉する樹木が少ない。秋だなあ、と感じる光景が少ないのである。
そして季節は冬へ。人々が暮らす麓は亜熱帯気候であり、滅多に雪は降らない。しかし、標高１０００ｍを超えれば、冬は雪に包まれる。

人々をさらに拒む厳しい冬がやってくる。海は荒れ、空はどんより暗い。亜熱帯気候とは言え山がすぐそばに聳えるため吹く風は冷たく、ストーブや炬燵も必要である。

かつては日本最南端での雪まつりも開催されていた。近年は暖冬傾向とのことではあるが屋久島は近年更に豪雪の冬を過ごしている。２月中旬には少しずつ春の兆しが見えはじめ、菜の花が咲き誇る。

そして桜を待ち焦がれる日々となり、季節は巡る。

■日常生活

鹿児島県の最低賃金は６４２円（平成２２年１０月２８日発効）全国平均は７３０円。

ランキングで最下位から５県までを沖縄と九州で占めており、屋久島も鹿児島県に準じている。では、日常生活にかかる費用は全国と比べてどうなのか？

全国より安いもの：土地、家賃。

島の中でも街の中心と思われる辺りでも坪２万円くらいが相場。商業スペースの一等地でも１０万円くらいとか。

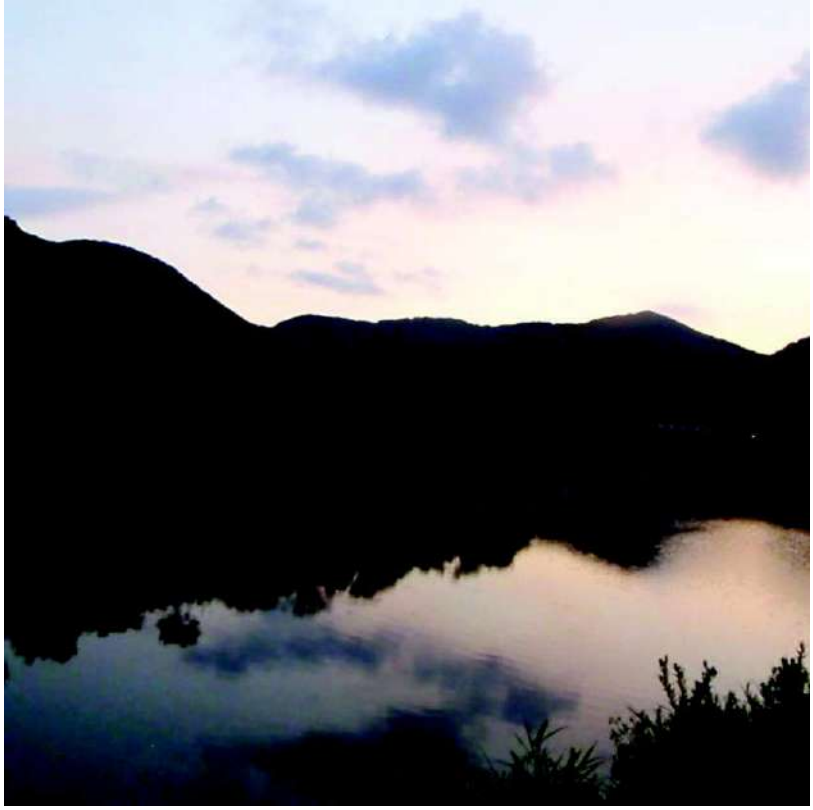
私が移住して最初に住んだアパートは２ＤＫで家賃は４万円。それでも当時は高い物件として大家は島の人々から非難を受けていた記憶がある。しかし、そもそもアパートなるものが殆どなかった時代でもあり、家賃の相場もあってないようなものだった。

ちなみに現在でもアパートは少なく、一人暮らし用アパ

ートで４～５万円くらいが相場。住みたいと言われても住む家は少なく、常に周りで家を探している人が多い。

では、全国より高いもの。
残りのほぼ全てと言っても良いであろう。
生活に関わる物資、食料の殆どが船に乗って運ばれてくるため、当然運送料が加算されている。記憶に新しいのは数年前のガソリン代の急騰の際、屋久島では２００円を超えている。また、台風などの天候不良で船が欠航すればたちまちスーパーには何もなくなってしまう。食糧がなんでも賄えていると思われがちではあるが、現実はそうではない。それは屋久島の人だけではなく何処でも同じことなのだが、国産のものや地元産のものはかえって価格が高くなってしまったりして輸入の安いものに手を出してしまう。本当は自分の目で舌で確認できる安全で美味しい食材も近くにあるはずなのだが...。

需要と供給のバランスが崩れると農業や漁業といった第一次産業の従事者は減り、ますます美味しいものが食べられなくなってしまい、アイデンティティの築かれない社会に向かっていくのかもしれない。



　ニッポンの誇りである四季の移ろい、自然の恵みが存分に味わえる屋久島。常に自然と背中合わせの暮らしには、人間の無力さを見せつけられることが多い。それでも当たり前と思っていることの大切さや、本当に必要なものに気付くことが出来る、素晴らしく豊かな暮らしがここにはある。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

第四章　　屋久島の祭り

離島の暮らしは日々の営みの中で自然の恩恵を受けて生きているという実感が必然的に強くなる。屋久島は古くから山岳信仰の地である。その屋久島で見られる祭りのほんの一部ではあるが紹介したい。

■山の神祭り

旧暦の正・５・９月１６日。
山に感謝し、山に入らない日。
かつての屋久島は詣所と呼ばれる場所から先の山には女性や子供が入ることが許されなかった。それでも年に３回は男性も山に入ることをせず麓で日頃の感謝を捧げて過ごす日、それが山の神祭りである。また、この日は山姫が水を汲みに下りてくるとされ、山姫に出会ってしまうと血を吸われるという伝説もある。

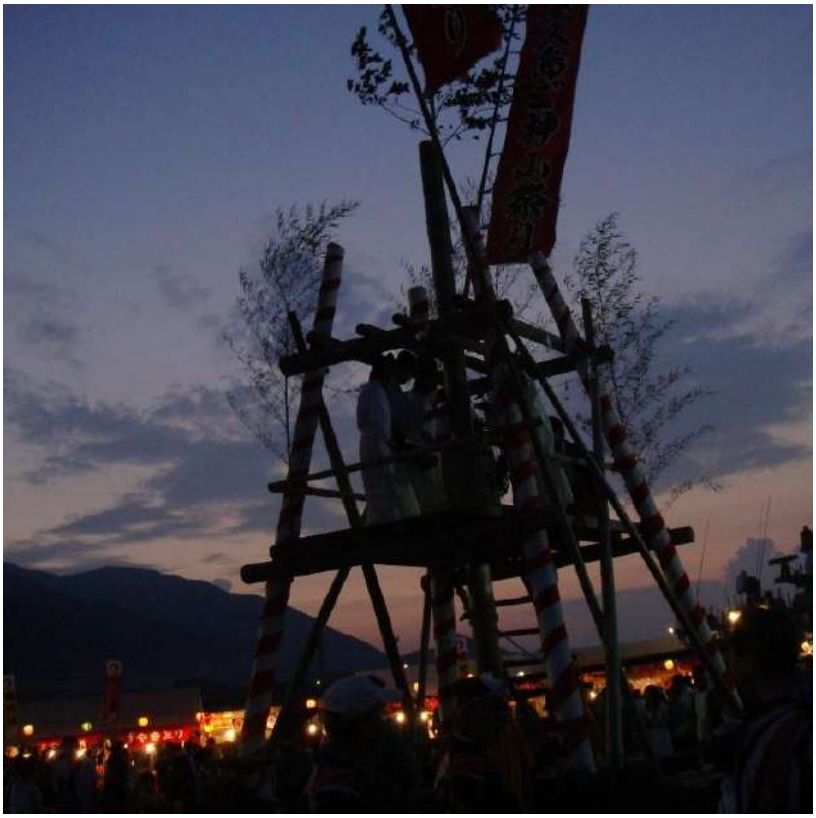
■海祭り

海４月中旬、山が新緑に包まれ森が柔らかな彩りを見せる頃、いよいよ屋久島はトップシーズンを迎える。そのシーズンを迎える前に屋久島じゅうの海岸や港などを清掃するイベント。清掃するポイントが数多くあるため自分の地域の海岸などに集まる、朝の涼しいうちの２時間。

遠く海の向こうからのゴミに様々な思いを巡らせる時間でもある。
午後には子供たちのためのカヌー体験などのイベントが行われるが、何よりも清掃のあとに見られる子供たちの誇らしげな顔がきっと故郷を大切に思う気持ちを必然的に育んでいるのであろう。

■ご神山祭り

屋久島最大のお祭り。いわゆる夏祭りであるが、この祭りは山岳信仰に基づく伝統文化の継承を伝えるべく続けられており、



お水取りから始まる神事の中でも住民が参加する火熾しがある。この櫓の中央には大きな丸太があり、その丸太に巻かれた大きな綱を海側と山側で引き合い、その摩擦で火を熾す。このご神火は人々の無病息災を願い火櫓を燃やし続ける。

その神事の際には屋久杉で作られた太鼓を使っての奉納演奏も行われる。
なお、この祭りは３０年前に生まれている。町興しと伝統文化の継承など様々な思いも込められており、水中花火など島民にとって夏の一番の楽しみでもある。

■やくしま森祭り

これまでに紹介した祭りと並べるには些か傲慢かとも思うが、是非この機会に一人でも多くの人に知ってもらいたい。
私自身が発起人として名を連ねるこのイベントは１０月の満月の夜、２０００本のキャンドルを使用して行う音楽祭。屋久島総合自然公園という森の中にある町立の野外ステージを使ってのコンサートだが、使用する電力は３０Ａと一般的な住宅と変わらない容量で行い、また出演アーティストやスタッフ全員がボランティアで作り上げるイベントである。

島で唯一の屋久島高校のボランティア部や屋久島町商工会青年部を中心として島の若者たちが総出で全て手作りの作業を行う。

まずステージの音響効果を高めるために間伐や枝打ちで切られた杉の葉で壁一面を埋め尽くし、２０００本のキャンドルもひとつひとつ並べられ、開会式では入場者と共にキャンドルの点火を行う。

ゴミを出さない祭り、を提唱し会場にはゴミ箱を設置せず、持ちこんだものは自分で持ち帰りいただく。チラシを配布することもせず、入場券も紙のチケットではなく手ぬぐい。小さな子供からお年寄りまでみんなが楽しめる生きた音楽を届けること、屋久島の自然に生かされ生きることに感謝を捧げることを掲げた祭り。家族みんなでゴザやお弁当などを持って集まってくれるこの祭りが子供たちの誇りとなることを願っている。６年前、この祭りを企画した際に相談した方の言葉が今でも私の支えとなっている。

「どれだけの伝統も、必ず始めた人がいる。花火のようにパッと上がって終わりじゃなく続いてゆく祭りをやりなさい。」と。

やくしま森祭りは昨年５回目の開催。まだまだまだ生まれたてのお祭りではあるが、受け継がれ語り継がれていくものになることを信じ、また今年も開催出来ることを祈る。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

番 外 編

ひょんなことから実現した巻末座談会を終え、自身の幼少期からの育った環境を振り返ることになった。

■幼稚園時代

ベビーブームに生まれた私はまず公立の幼稚園に入園出来るかどうかが抽選であり、見事にハズレを引いてしまったらしく近くの私立の幼稚園に入園した。その幼稚園で過ごす２年間、私は自閉症児として扱われている。毎日のように送り届けてくれた母に泣きすがり先生にご挨拶の出来ない子供。

今その当時のことを思い出そうとしても本当に記憶にあることなのか、またこんなことがあったんだと聞かされてきたから知っているのかわからないことも多いが、ふたつの出来事が鮮明に記憶に残っている。幼稚園での２年目つまり年長になってからも朝の「おはようございます」が言えない。ある先生が私を叱り、年少のクラスへと連れてゆく、泣きわめく私、というシーン。それがひとつ目。もうひとつは何のきっかけだったのか突然そのご挨拶「おはようございます！」を口にする。先生が泣いて喜び抱き締めてくれたこと。

今思い出しても、どうしてそれほどまで嫌だった幼稚園に私は通い続けたのだろう。その記憶はあまり蘇らないので数年前母に聞いたことがある。行きたくなかったら辞めても良いよ、と家族で話し合ったという。それでも私は行くと言ったのだと。母曰く、一人だけ私が心を開いていた先生がいたから楽しいこともあったのではないかと。ただ、母にとっては他の先生方からもいろいろ言われたりして良い思い出のない２年間だったようである。親の心、子知らずで３０年後に知った事実。道理で当時の写真がほとんどないわけだ。

■小学生時代

同じ幼稚園から同じ小学校へ入学する友達がいなかった私は、幼稚園時代からの人見知りの激しさをかかえての低学年時代。２年生くらいまでの記憶が殆どない。覚えていることと言えば給食を食べるのがとても遅くて昼休みに外で遊ぶことが出来ず一

人で食べていたこと。３年生くらいから少しずつ楽しかったことが思い出される。ようやく友達が出来てきたのだろうか。卒業する頃にはすっかり今の私から想像出来るような活発でちょっとゴンタな子供になっているが、それまでにはとても寂しい日々があったのである。

■石原先生との出会い

今回、私たち元教え子の願いを叶え座談会に応じてくれた石原先生との出会いは５年生の時。それから２年間石原学級で過ごした私は、小学校の時の思い出のほとんどがその２年間にある。私たちの学校、学年には障害児が複数人いた。石原先生は、その彼らとの付き合いを真正面から私たちに問いかけ、また様々な提案、チャンスを与えてくれた。その度にクラスでは話し合う時間があり、個々の自主性もさながら個性が明確になる。いろんな出来事が今でも鮮明に記憶に残っている。それを先生はドラマ作りをしたかったと云う。確かに、３０年近く経った今でも当時のことはドラマの１シーンのようにひとつひとつ思い出される出来事ばかり。障害を持つ同級生と私たちと同じ時間を同じように過ごすためにはどうしたら良いのか。同じクラスの同級生の中には障害を持つ友達と積極的に関わる人もいれば避ける人もいる。そんないろんな気持ちをぶつけ合って過ごした２年間の中で私は自分の意見をはっきりと言えるようになったと感じている。私は自分の当時の石原先生は今の我々の年齢くらい。今の私が小学生に、またその親に向き合えるだろうか。今回の対談は今の自分にもまた大きな刺激を与えてくれた時間となった。

■小学校を卒業後

記事の中にもあるように中学生になった私たちは同じように過ごして来なかった隣りの小学校からの同級生との温度差など環境の変化により葛藤が生まれている。今となってはそれが今の社会の現実なんだと思い知らされた時なのかもしれない。

長い年月を経て今、当時のことを思い出しながら今私たちが出来ることは何だろうか。それは当時の私たちの思い、先生の思い、それをあらためて問い、知ることで今があることを多くの人に伝える、ということでした。

ここに対談を提案してくれた同級生の千葉くん､きっかけを与えてくれた鶴谷さん、教え子の無茶ぶりを受けてくれた石原先生に心より感謝いたします。ありがとうございました。

やくしまに暮らして

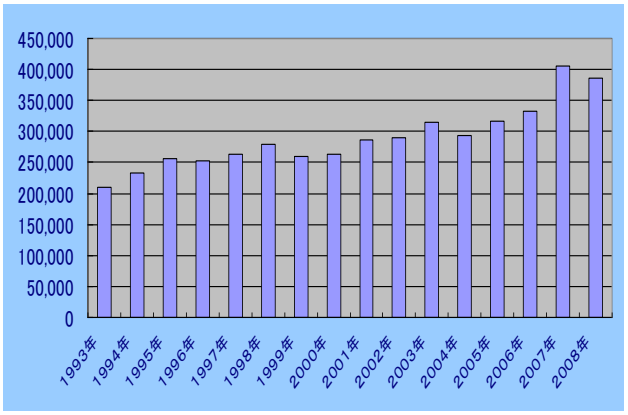
ネイチャーガイド　大野　睦

第六章　世界遺産登録後の歩み

■環境の変化

世界自然遺産登録の背景は第一章に述べているので、ここからは登録後の歩み、その背景について触れたい。

１９９３年に世界自然遺産に登録された屋久島の観光客数は緩やかに右肩上がり。離島であるが故のアクセスの不便さ、すぐには追いつかないインフラ整備。夏は台風銀座、冬は北西の季節風により天候不順が続き、交通便の欠航も珍しいことではない。



そんな背景の中、屋久島の観光客数は１９９３年からの１５年間で約２倍となる。しかしながらその交通便の不便さこそ屋久島を訪れる観光客数を緩やかに増加させた理由でもある。他の世界遺産登録地域でよく聞いたのが、登録直後に急増した観光客。しかしながら増加を続けるといったことはなかったと。もちろん、登録地のすべての地域において観光客が増加することを歓迎している訳でもなく、突然たくさんの人が訪れるようになり、大型バスの騒音や排気ガス、生活環境までも脅かすことになり困惑している事例も少なくない。

今年世界遺産登録地となった小笠原や平泉においては来年一年は大きな影響を受けることになるであろう。

屋久島では観光客が急増しなかった理由として交通アクセスや宿泊施設が急激に増えることなく物理的なハードルがあったことが最も明確な原因であるが、実際には島外からの大手資本によるホテル建設の話が出たりしながらも頑固として受け入れなかった動きもあり、ただただ大きな力に揺れ動かされないようとした背景がある。

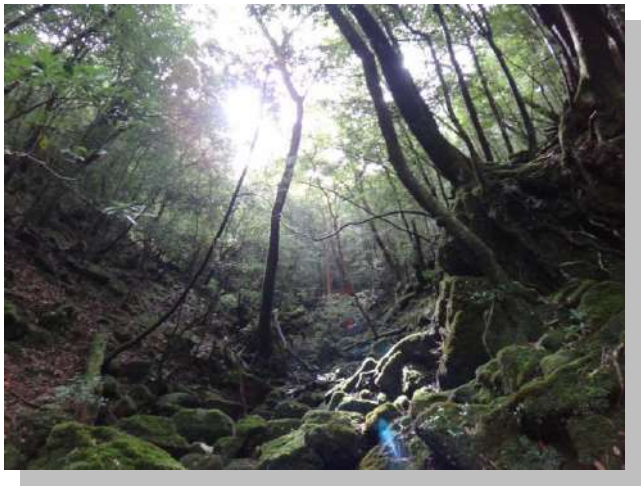
また、屋久島の場合は日本で初めての登録地であり、世界遺産という言葉にも屋久

島という島の名前にも馴染みがなく、登録から数年後にようやく認知度も高くなり、モデルケースとして他の地域、とりわけ世界遺産登録地や世界遺産登録を目指している地域、観光地からは注目を浴びるようになる。また、米国同時多発テロなど、諸外国に起きる様々な事件などからも若年齢層の海外離れが目立ち、国内での旅行が伸びた時期もあり、屋久島においてはその影響を大きく受けた背景がある。

■現状と課題

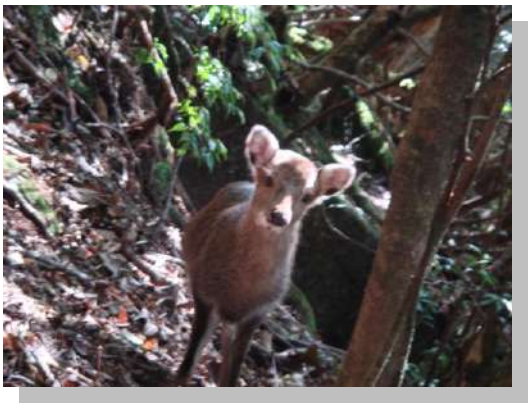
他の地域からはとても理想的な増加傾向のある屋久島の観光。初めての登録地として無我夢中で歩んだのかもしれない。いや、突っ走ったのであろう。気が付けば設備や施設の老朽化は進み、耐用年数を大きく超過していたり、現実の利用者数と利用許与量に大きな差が生じており、建設当時の現状や試算と現状の格差が浮き彫りになっている。特に山岳部におけるトイレについてはその問題が顕著であり、既設トイレの修繕や増築にも着手出来ず、また新設トイレについてもその環境からリスクの高さが目立ち、現状では携帯トイレの導入について環境省や観光協会で推進し、今すぐ出来ることとして観光客にも協力を要請、使用を促進しているが、同時に鹿児島県や屋久島町では既設トイレの汲み取りに掛かる経費を捻出するべく山岳部保全募金への協力も要請しており、その複雑な管理体制によりわかりにくい部分、重複している部分などを統一させるためにも一本化が望まれてい

る。また、観光客のニーズの多様化により、特に宿泊業やガイド業ではそのニーズに応えるべく様々な受け入れ態勢があるのだがその違いが明確でないケースもあり、また、その年毎にめまぐるしく変わる時代背景は情報に溢れる時代だからこそ多種多様化し複雑にもなってきているのかもしれない。



屋久島に限らず、世界遺産登録地いずれの地域でも抱える問題点として、環境省、都道府県、地域行政といった縦割りでありながら役割や責任を共有しないため、歩み寄りやすり合わせ、つまりは同じ目標に向かい手を取り合うことが非常に難しいことが挙げられる。

観光業が発展し観光客が増えたことで環境破壊が進んだが行政は何をしてきたのか、等と批判する人も多い。どうすれば良かった等、結果から評価することは容易いことである。どうであれ、今を生きる我々が見ている、今目の前にある事実を見据え、またしっかりと分析や検討を重ねなければ、ただ誰かに責任を押しつけているに過ぎない。



屋久島では観光業が発展して民宿やガイドが増えたことに（特に移住者が参入していることも含め）異論を唱える人も多いが、それが今の屋久島が進んできた時代。屋久島が望んでそうなってきたのだと私は感じている。正しくないこと、間違っていること、望んでいないことであれば軌道修正をしていけば良い。

もし屋久島の殆どの住民が、世界遺産に登録された当時に今の屋久島を想像していたならば。もしそんな近い未来にしっかりとした目標が掲げられていたならば。あくまでも仮定の話であり、今から近い未来の目標を掲げれば良い。

まもなく屋久島は世界遺産登録から２０周年を迎える。その時、それからの２０年後の屋久島について行政も住民も同じ目標を掲げ、あるべき屋久島の道を共に歩んでいくことが必至であり、問われるところになるのであろう。

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

第七章　ウミガメのこと

■何故ウミガメの話？

実は第一章でも述べているのだが、私が屋久島に移住した一番の理由がウミガメにある。幼少期より地元大阪よりいちばん近いウミガメ産卵地である和歌山県千里浜で毎夏ウミガメ観察をしており、学生時代に参加した日本ウミガメ会議、そして屋久島での生態調査ボランティアで学んだことが屋久島で暮らしたいと思う気持ちを募らせた。ここではウミガメから見る今を私なりの視点でお伝え出来ればと考える。

■日本のウミガメ

日本人にとって一番馴染みのあるウミガメはアカウミガメであろう。何故なら日本本土に上陸するウミガメはアカウミガメだからである。他に沖縄、小笠原にて上陸産卵が確認されるアオウミガメ、そして八重山諸島ではタイマイの上陸産卵が確認できる。この３種類が日本で上陸産卵するウミガメである。

日本で有名なアカウミガメ産卵地としては和歌山県千里浜、四国にはＮＨＫ連ドラの舞台となった徳島県大浜海岸がある。しかしながらどの地域のウミガメ産卵地としての環境は悪くなる一方で、かつ上陸産卵数の減少が止まらない地域も珍しくない。
また、古くよりべっ甲細工の材料として使用されてきたタイマイの甲羅も日本人にとって馴染みのあるウミガメと言えるであろう。

■絶滅危惧種としての位置づけ

日本に上陸産卵する３種のうち、アカウミガメとアオウミガメは絶滅危惧ＩＢ類(EN)に分類され、ジャイアントパンダやシロナガスクジラと同じであり、タイマイは絶滅危惧ＩＡ類 (CR)に分類され、こちらはシーラカンスやオランウータンと同じである。ウミガメが絶滅危惧種であるということは今も多くのウミガメの生息の確認されている地域においても非常に認識が薄いところが多いというのも現状である。

■世界のウミガメ

世界に生息するウミガメは８種（説によっては７種）に分類され、そのうち５種が絶滅危惧種である。また、日本の領海に生息するウミガメは上陸産卵にやってくる３種のほか３種類おり、全部で６種類。また、数年前には日本でこれまで産卵が確認されたことのないオサガメの産卵が奄美大島で確認されたこともあり、その生態についてはまだまだ解明されていないところの方が多く、このまま絶滅してしまうと尚更未知の生物となる可能性がある。

■屋久島のウミガメ

屋久島は日本最大の、そして北大西洋最大のアカウミガメの産卵地であり、日本のアオウミガメの産卵地の北限地でもある。これまで、屋久島で確認されているアカウミガメの産卵回数は日本で確認されている産卵頭数の約３０％と言ってきたが、ここ数年でまた更に屋久島の占める割合は高くなりつつある。屋久島で見られるウミガメが増えたのか、それとも他地域で見られるウミガメが減ったのか、どちらも大きな要因ではある。しかしながらウミガメの上陸頭

数だけを見えみると増えてきているとみられる部分もあるのだが、上陸しても産卵できない要因も多く、産卵率は年々低下しており、様々な環境の悪化は否めない。

、

また、２０１１年は屋久島でも台風の被害を受け、１０数万個のウミガメの卵が流出している。

台風は自然災害だからと言い切れるほど人はその環境に手をつけずに暮らしてはいない。我々人間の環境は凄まじいスピードで、かつ目まぐるしく変わる今。その環境の変化は海や森など、取り巻く自然環境に影響を与えている。このままウミガメが絶滅する日を迎えるのだろうか。私は仮に自分が生きているうちにそのことが避けられないとわかっても、今自分が出来ることが何か問い続け行動し、そして伝えてゆくことを諦めず、今年もまたウミガメに会いに浜へと向かうのであろう。

参考資料

日本ウミガメ協議会

http://www.umigame.org/

屋久島うみがめ館

http://www.umigame-kan.org/

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

第八章　暗闇が教えてくれること

■日食

つい先日、日本じゅうのあちこちで空を見上げるひとときがあった。地球から見えている太陽の前に月が重なり、その部分が欠けて見え、そしてちょうど太陽の真ん中に重なった時にリングが見える金環日食。そのリングを見ようと、小さな子供からもうまもなく１００歳というおばあちゃんまで、その瞬間を待ち侘びていた。こんなにまで一斉に空を見上げた日がかつてあっただろうか。少しずつ太陽に月が重なり、太陽がまるで月のように欠けてゆくのをたくさんの人が見ていたひとときである。

２００９年、ここ屋久島では今世紀最も長い皆既日食が見られるということで、多くの観光客がその日に合わせて来島した。日本の陸域で４６年ぶりとなったこの時の皆既日食は、奄美大島の北部や屋久島、そしてトカラ列島など離島ばかりであったため、中でも特にインフラ整備の条件の良い奄美大島や屋久島には日食目当ての観光客が多く来島したのだが、残念ながらこの時の皆既日食はそのほとんどの島で天候条件が悪く、しっかりと太陽を見ることは出来ていない。しかしながら、この日のできごとは私に天変地異という言葉の意味を強く認識させてくれた。

曇り空ではあったが真夏の日中に、少しずつ暗くなっていき、セミが鳴き始め、街灯が点灯し、数分間は夜のように闇に包まれた。いつも当たり前のように太陽が昇れば朝がやってきて、太陽が沈めば夜になり、という日々の営みを日常として身体は自然とそのサイクルで動いているということ、そしてそのような日常のサイクルに変化が生じた瞬間が天変地異なのだと実感したのである。

■月食

２００７年８月。日本じゅうで見られた皆既月食。月が地球の影となり隠れてしまうということで、月がその姿を現したとき

にはぼんやりとした色の月で、月が出たばかりの時に見られるその赤さとはまた違っていた。

先ほどの写真から約３０分後の月。少しずつ陰からそのいつも見る月が見えてきた。この日はやはり月の明るさというものを実感し、ほんの一時間半ほどの天体ショーに感動したのだか、最後、その月が全ての姿を見せてくれた頃にはなんだかホッとしたのを覚えている。

■満天

昼でも夜でも、その空を見るとき私たちは見上げる、という表現をする。実際には地球上に重力で立つ私たちからその宇宙というのは上にも下にも広がっており、流れ星が必ずしも上から斜め下へと見える訳ではないことで実感できる。

このような満天の星空は、本来どこにいても見られるものである。そして、それが見られないとしたら、月が明るい夜や雲で空が覆われている時なのだが、現実的にこのような満天の星空が見える場所はとても限られており、見られない要因を作っているのは、他でもなくまちの明かりであり、またそのようなものが少ない場所では空気も澄んでいるので、尚更きれいな満天の星空が見られる。

■ホタル

小さい頃、大阪に住んでいたが車で１５分くらいのところにホタルを毎年見に行っていた記憶がある。今もそこではホタルが見られるのだろうか。幼少期の記憶として遠い過去になってしまっているが、今私が暮らしている場所は小さいけれど家のすぐ脇に川が流れており、家の周りでもホタル

が飛ぶのが見られるため、その時期はときどき家の全ての電気を消して庭でホタル観賞を楽しんでいる。

また、ウミガメが産卵にやってくる浜でもその中を流れる川があり、そこからやってくるホタルが海辺でも舞う姿が見られたり、島の至るところにある川でホタルが見られる場所があり、梅雨入り前の長閑な風物詩である。

■闇は何もかも隠すのだろうか

一般的に、闇という言葉には、見えているものを見えなくさせるとか、真っ暗で何も見えなくなるように使われているが、屋久島に暮らして、本当の闇はそうではないと感じるようになった。満天の星空も、夜空に走る流れ星も、砂浜の波打ち際やウミガメの甲羅で光る夜光虫も、そしてお月さまも、また夜空に広がる雲も、空を舞うホタルも、真っ暗な闇があるからこそ、その輝く姿を見せてくれていて、街灯がたくさんあるところ、街明かりが消えないところ、透明感のない海や空ではこの姿を見ることは出来ない。

本当の闇が見せてくれるものは本来そこにあるもの、本当の美しさではないだろうか。これが私たちの暮らすこの国の美しさなのではないだろうか。

そしてまた、空を見たりホタルを見たりという時間は自然の中で過ごすこと同様、都会の暮らしの中ではすぐに見られないこともあり、忘れがちなことなのではないだろうか。そんな忘れていたことも思い出させてくれる本当の暗闇の世界。多くの人がそんな世界に向き合う時間を少し取り戻すことが出来たらと、かなりお節介なことをその夜空に願う。

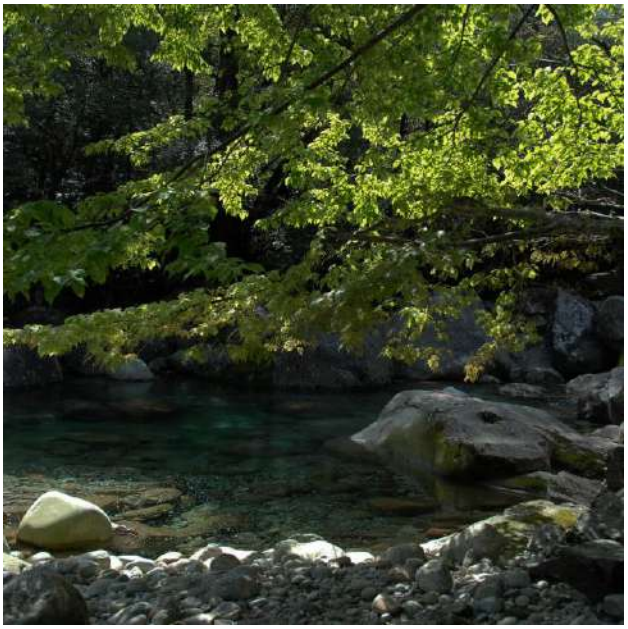
大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

第九章　　ライフライン



■水

屋久島には水が溢れている。山間部では年間１００００ミリもの雨が降る。その雨が屋久島の自然はもちろんのこと、私たちの暮らしを支えている。月に３５日雨が降ると言われれば、屋久島では本当に毎日ずっと雨が降っていて、青空を見ることなんて年に何日もないのでは？なんて印象を持たれているらしいが、そんなことはない。平地でも大阪や東京の３倍以上の雨量が観測されているが、屋久島は熱帯雨林でもなく四季のはっきりとした日本の気候そのものである。

春には春の「木の芽流し」と呼ばれる雨が降り、新緑を美しくする。梅雨入り前の５月はさほど雨は降らず、初夏の屋久島を楽しむことが出来る。６月には梅雨の止まない雨。７月から９月の雨量は多くは台風がもたらしてくれるもの。秋には静かに雨が降り、冬の雨は雪へと変わる。一年中、雨の恵みに困ることのない屋久島では断水になることがほとんどない。私が屋久島に暮らして１７年。一度だけ断水になったことがあるが、それは台風で送水ポンプが壊れたから、という理由であった。われわれ人間が生きるために欠かせない大切な水はまさに溢れんばかりにあり、その贅沢な環境を当たり前に感じてしまうが、島を出たときにその水の美味さや清らかさにあらためて感謝する。

■電気

昨年の東日本大震災以降、各地で計画停電の対策、また節電への呼びかけが続いているが、屋久島には九州電力からの送電地域は極わずかであり、ほとんどが屋久島電工から送電されている。そして、その電力の源は水力発電であり、今や電気に至っても豊富な水から生み出される。今となっては原発問題、エネルギー問題が取り上げられる際に、世界自然遺産の屋久島がクリーンエネルギーで生活をしていることが少しずつ知られるようになってきたようだが、この暮らしは決して安泰ではない。何故なら毎年夏から秋にかけて台風が幾度も通り過ぎてゆくからである。その台風のたびに数時間の停電や１～２時間の停電が断続的に続くことや、長ければ２日間停電になることもある。また、雨の多いとき、雷雨のときにも停電になることがあり、その度に「無計画停電」に慌てず、憤ることもなく自然の営みの流れを見つめ、ただただじっと過ぎ去るのを待つのみである。

■ガソリン

生活に必要な物資などは船で運ばれる。離島なのだから当然のことではあるが、そのことがあらゆる物価を高くさせており、日用品や、食料品、ガソリンの価格が本土の２割増くらいになる。また台風で船が欠航すればスーパーから日配品など食料が消えてゆく光景も珍しくない。このことは以前第３章でも触れているが、こうして物価が高くなっていることも離島の暮らしには致し方ないのかもしれないが、背負うリスクとしては些かフェアじゃないと言いたくもなる。

もちろん、私自身はここを選んで暮らしており、恵みもリスクも受けとめているのだが、様々な面で矛盾のない、もっと暮らしやすい社会へと変わることを切に願う部分もあるが、これだけ自然の恩恵を目の当たりに生きることが出来ることも贅沢な暮らしであると感じている。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに
暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十章

冬の屋久島

はじまりのとき

南の島、南国に冬はないと思われがちであるが、屋久島は日本列島の北から南までの気候や植生が見られる島である。秋があまりはっきりしないままに急に冬がやってくる、と言った印象を受ける屋久島。このツワブキの花が咲くと秋も終盤、そして冬のはじまりのときを知らせてくれる。

このツワブキが満開になる頃、まだススキもとても綺麗で秋真っ盛りとも言える景色もすぐ隣り合わせに見られる。

もうひとつ、冬のはじまりを知らせてくれるのがぽんかんの収穫。はさみ入れが終わり、本格的に収穫のシーズンとなる。そしてお歳暮の商品として屋久島から島外・県外へと出荷されてゆく、観光シーズンとしては終わりつつある季節ではあるが、何かと忙しい屋久島の冬のはじまり。

正月

屋久島のお正月は、天津日高彦火々出見命、つまり山幸彦を主祭神として祀る益救（やく）神社では、大晦日から元旦にかけて厄払いの年越し奉納太鼓の演奏が行われ、厳かな時間が過ぎてゆく。この益救神社の奥社は九州最高峰である宮之浦岳にあり、山岳信仰の島の歴史が今もなおしっかりと残されている。

また、この宮之浦岳山頂付近の平均気温は北海道・札幌並みの気温であり、この屋久島が日本列島の北から南まで見られることを教えてくれるひとつの証でもある。

そして人々に恵みをもたらせてくれるのは山だけではない。屋久島の北に位置する一湊はサバ漁が行われるところで、正月には海に向けて大きな門松が飾られる。

積雪

私がこの島に暮らし始めた頃には毎年２月に雪まつりが行われていた。北国から雪が届くのではなく、屋久島でも積雪は見られる。毎年１２月の初旬には初雪が確認され、寒波などで天気が荒れ模様になったときには山岳部への道路は積雪や凍結のため通行止めとなり、屋久島の山は人を寄せつけない厳しい季節となる。

北国ならではの緊張感のある凛とした空気が冬の屋久島にも張りつめる。しかしながら森で見られる景色は屋久島独自のものであり、北国とはまた違う。

大野　睦　ＢＬＯＧ

やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに
暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十一章
講演の仕事

それぞれの地域の魅力

日頃ガイドとして屋久島の自然についてお話させていただいている中で、お客様との会話の中には、国内外の他の世界遺産地域との比較や違いについて話題になることも少なくない。またお客様から多くを学ぶことも珍しくなく、私が知らない世界各地の素晴らしい地域や世界遺産のこと等、話題に尽きない。そんな私は大学を卒業した頃はまだすぐに自分の定住する場所を決めるつもりはなく、世界じゅう各地を訪れたいと考えていたので、今でもオフシーズンを中心に島外や国外の地域を訪れることが多くなっていた。２００７年に屋久島観光協会理事としてガイド部会長に就任してからは、島内外にて何かと公職をいただくことも増え、講演させていただくことも増えてきた。そんな時、屋久島のことばかりを話しているのではなく、呼んでいただいた地域の魅力や、屋久島との違いなども話す必要も出てくるため、必然的に講演の前にはそのまちの魅力や背景、歴史などをお伺いしたり、歩いてみたりして自分が感じたことをお話させていただいている。そうしているうちに２０１０年には当時の日本にある世界遺産１４箇所全ての地を訪れていた。翌年には、また新たに２カ所登録されることになるのだが…これは私にとってまた新たに訪れる地域が増えたので、今後の旅先を決める楽しみになった。

講演とガイド

屋久島とこの地域の違い、というのは講演だけでなくガイドの仕事でもよく用いる。例えば、ここ屋久島で見られるこの植物は屋久島では〇〇に使ったりしますが、関東では、〇〇に使われていますね、など。自分の身の周りのことや知っていることと、今目の前にあるものがリンクするとき、人はその話を印象付けて記憶しやすくなるが、目の前の樹木や草花について、ただただ種の名前だけを伝えたところでそうそう面白いはずはなく、講演の際においてもデータだけを数字のままに読み上げたり、画像を見せてこれが何です、とだけ話しても面白いはずがない。どれだけ自分のことと比較して現実味をもって感じてもらえるか、またどれだけ興味をそそることが出来るか、講演であってもガイドであってもエンターテイメントとして必要とされる要素は同じなのである。ちなみに写真はにっぽん丸にて船内講演をさせていただく際に用意していただいているネームプレート。講師としてではなくエンターティナーとして自分が求められていることに誇りを感じている。

島外での講演

屋久島観光協会ガイド部会長に就任した２００７年から２０１１年の４年間に、屋久島が世界自然遺産に登録されて１５年を迎えた。その際に屋久島でも様々な立場からの屋久島の１５年を振り返る機会もあり、そしてまた日本各地では世界遺産登録を目指す地域が増えてきたことにより、私が島外で講演をさせていただく機会が増えてきた。これまでに北は紋別、南は石垣島まで各地を訪れ、屋久島の概要や世界自然遺産としての価値、屋久島の魅力などだけでなく現在の屋久島が抱える問題や課題についても述べさせていただいている。どれだけ真似しようとしても絶対に同じにはならない。それぞれの地域がそれぞれの魅力をしっかりと地域で守りながら発信してゆくことが必要であるし、発信の方法だって重要である。私が話す内容には、もちろん屋久島の誇るべきところもふんだんに紹介させていただくが、何よりも屋久島が失敗した点、今反省すべき点も、包み隠さずにお伝えしている。エコツアー先進地と言われる屋久島から、同じ過ちや同じ失敗を繰り返すことなく世界に誇るべきニッポンの人や自然、文化を発信出来たら、そこにしかない本当の魅力の欠片を伝えることが出来たら、多くの人がその地域に大いなる期待や希望を持ち、想像力を膨らませて旅を楽しんでくれることでしょう。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに
暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十二章

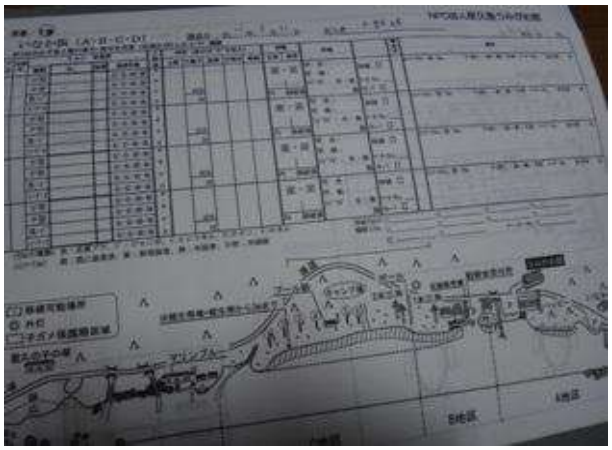
記録と記憶

記録とは何か

何かと便利になった時代。写真はデジタルで保存されることが主流となり、手紙から電子メール、こうして今書いている原稿も手書きからパソコン。これが今は当たり前となっている。しかし写真だけで伝わらないその場の空気。それは温度だったり、湿度だったり、また聞こえてくる波の音だったり。もちろんそれを数字や言葉で文字として一緒に残していくことは出来るかもしれない。また、文字として残したものをまとめてデータ化することも出来るであろう。しかしながら、どれだけの記録をデータ化しても、その記録からその時の空気は伝わらないのだと改めて感じた出来事があった。

２７年間の血と汗と涙の結晶

ＮＰＯ法人屋久島うみがめ館の活動は今から約３０年前にさかのぼる。屋久島ウミガメ研究会として発足し、ウミガメが無事に卵を産み、仔ガメが無事に海にかえることの出来る美しい浜を残そうと、まさに夜な夜な浜に出てはウミガメを確認し調査・保護活動を行ってきた世界的にも貴重なデータを蓄積してきた団体である。そのウミガメ調査に関わるデータはまずは調査票にボランティアの手によって手書きで記入される。まさに血と汗と涙の結晶である。その調査票のほとんどが放火事件に巻き込まれ焼失するという出来事である。そのことを聞いた私は何だかとても虚しい気持ちになった。その調査票にはそれぞれの調査者の確認したウミガメのタグ番号や産卵場所や時間など細かく記載されており、今ではその調査票を元にパソコンに入力。初めて上陸したのが何年前であるか、誰がそのタグを装着したのか等、様々なことがわかる。つまりはその手書きの調査票は後にしっかりとデータとして記録されており、何も失っていないのかもしれないが、私はどうしてもその失われたものの大きさに言葉を失い、そしてまた記録とは何か、と思うようになった。



記録を伝える記憶

この画像は２０１１年７月に台風による高波で浜が浸食し、流出してしまったウミガメの卵と、その卵と一緒に記録として入れていた私の書いたメモ。この日の出来事も私にとっては鮮明に記憶に残っているがこの画像はその記憶を伝える記録としてとても重要なものである。つまりは記録は記憶を辿る大切なデータであるが、その時のことを体験した人にしか、その記録から真実は語れないのだと思う。それは戦争であり震災であり、全ての出来事がきっとそうなのであろう。何はともあれ、悲しんでいる暇もなく今年もまた多くのウミガメが屋久島にやってきて卵を産んでいる。毎晩の一頭一頭の記録をしっかりと残し、日々の出来事の記憶とともに残していきたい。静かな夜にウミガメの背中越しに月を見ていたら、また仲間とともに一から始めればいいんだと、ようやく気持ちを切り替えることが出来た。

５年ぶりのジェーン

　そんな新たな気持ちをようやく持てるようになった矢先、今年のビッグニュースは右後肢がほとんどないアオウミガメ「ジェーン」の上陸。ウミガメは３～４年おきに産卵にやってくるが、ジェーンは２００８年以降上陸がなく、既に記録だけでも３０年ほど前から上陸が確認されており、推定でも７０～８０歳であろう個体である。昨年も上陸がなく、もしかしてもう寿命を終えたかと思っていたところである。ジェーンとの再会は記録を残すことの意味をあらためて深く感じるとともに大きな励みとなった。かつては１シーズンに６回の産卵をしたジェーンである。今年また再会出来る日が楽しみである。

NPO 法人屋久島うみがめ館

http://www.umigame-kan.org/

※ジェーンの画像はうみがめ館からお借りしました。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに
暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十三章

子どもの感性

親との時間

夏休みの屋久島はいつにも増して家族連れの観光客で賑わう。私の友人や知人が家族を連れて屋久島に来たり、屋久島を故郷とする家族が帰ってきて過ごしたり、屋久島に暮らしていても屋久島の大自然の中でゆっくりと子どもと遊ぶ機会をそう多く作れるわけでもなく、そんな家族の案内をさせていただくことが私の忙しい夏のひとつの楽しみでもある。そしてこの夏休みも初めての屋久島を過ごした家族に出会えた。いつも忙しく夜遅く帰ってくる父親の背中を彼はどのように見ているのだろうか。家族揃って出かけることはあっても父とふたりだけで旅をすることに緊張していたのだろうか。彼は言葉少なく私の話に応えていた。聞けば元々おとなしい性格だと言うが楽しんでくれれば良いな、とだけ願っていた。子供にとってはそれが屋久島でなくても何処でも良かったかもしれない。でも父は屋久島に連れて行こうと決めていた。

弟や妹がいて、母がいる家での時間とは違い、父が自分のことだけを見ている。屋久島の大自然にふれ、時間が経つにつれて彼の表情は豊かになってゆく。そこにあるのは特別な自然ではない。本来あるべき自然の中で、緊張はほぐれていったのかもしれない。

樹を見て森を見ず

大人にしてみれば､ガイドブックに載っている名所を巡ることが観光の大きな目的に思えてしまう。でも子供の感性はそこだけにはなく、でこぼこした山道を自分の足で歩くことが楽しかったり、そこに暮らす生き物たちを眺めていることの方が楽しいのかもしれない。目的地に向かって歩くことより、その森を楽しんでいる様子は、いつも大人が樹を見て森を見ていないことを教えてくれた。

大きな成長

海の水がしよっぱい、山を歩くのはしんどい、砂浜を歩くと靴に砂が入って痛いから嫌だ... など子供たちが自然を楽しむには入口から大きなハードルがある。自然の中で精いっぱい生きる生き物の姿はそこにいるだけで子供たちを成長させる。もっともっと楽しみたいと思うようになるのだろうか。気がつけば嫌いだったはずのことに自ら立ち向かっている。目の前で生きるチカラをもらっているのだろう。もちろん自然の中では、死に向き合うこともある。それでも目を背けず、しっかりと何かを感じている様子がはっきりと見える。

伝えたいこと

思えば、こうして都会で暮らす子供たちに日本の本当の自然の素晴らしさを伝えたくてネイチャーガイドという仕事を選んだ私。この夏は、限られた時間の中で、数家族と朝から晩まで一緒に過ごし、屋久島の自然を案内した。子供にとって初めて会う私は屋久島でいつも楽しいことをしていて、それが仕事だという。そんな仕事があることを都会で暮らす子供たちにしてみたら不思議かもしれない。でも、屋久島に帰ってきたら遊んでくれる人がいる、とでも覚えていてくれれば幸い。子供たちに伝えたいことは多くを語る必要もなく、この屋久島に来たら感じることの出来る日本の自然の素晴らしさを記憶の片隅にずっと残っていてくれさえすれば良いと思う。もちろん、その背景には日本が歩んできた時代があり屋久島ならではの歴史がある。それはまた大人になってから知って深く理解する機会があるだろう。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに
暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十四章

青　年

このまちで暮らすこと

人口１４０００人足らずの屋久島。小さなまちでも様々な行事がある。むしろ小さなまちだからこそ、様々なイベントでいつもその準備をしたりする人は限られていて、そんな人たちによって島のイベントは支えられている。私は仕事柄、どうしても運動会などに参加することが出来ていない。屋久島に暮らして何年か過ぎた頃、島で一番大きなお祭りにいつも参加できないことになんだか後ろめたさを感じるようになっていた。そこまでして仕事をするべきなのか？そう思うようになっていた頃、お祭りの実行委員会のボランティアメンバーに入れてもらうことが出来た。初めて住民として認められた気がして本当に嬉しかったのを覚えている。それからは毎年ボランティアスタッフだけで揃えた法被を羽織り、このお祭りの実行委員会メンバーの方々と準備や片付けの手伝いを少しだけさせてもらうようになる。もちろん、お祭りを見て楽しんでという参加の形もあるとは思うけれど、私にとっては実行委員会の方々と一緒に何か出来ることが嬉しい。今でも他の行事などには殆ど関わることは出来ていないが、小さなまちの中で青年世代が関わっていくことで少しずつ世代交代してゆくことは大きな意味があるのだと思う。

青年会議所との出会い

２０１１年、屋久島に青年会議所を設立しようという動きが生まれた。それまでも今も屋久島の青年世代といえば商工会青年部に所属し、前述のお祭りなどでも活躍していた。若者の少ない小さなまちである。いくつもの組織が出来ることには懸念の声も上がったが、それでも明るい豊かな社会の実現を目指し、２０１１年７月に屋久島青年会議所が設立される。この時も声をかけていただき、私は設立メンバーに入れてもらうことが出来た。屋久島青年会議所のメンバーの殆どは商工会青年部とのかけもちをしており、既に続いている行事やイベントではそちらでの活動となり、青年会議所では独自の活動を見出す必要があった。あまり目につくことはないかもしれないけれど、このまちにとって良いと思うことを少ない人数でもやってみることに意味があると信じての活動を続けて行こうと、少しずつ小さなことから活動が始まった。

４０歳になり

青年会議所は世界中でその活動が行われているが、２０歳から４０歳までと限られており、それぞれの任務も単年度制となっている。今年４０歳になった私は設立メンバーの中でも真っ先に卒業をひかえている。その最後の年に私は理事長という役職をいただいた。出来たばかりで何をしている組織なのか、その存在意義を他に知ってもらうためにはこれからという時であるが、それは残るメンバーに託して卒業を迎えるのである。この青年会議所活動は私にとって今という時を考える機会を与えてくれた。それまでは仕事に追われたりしているうちに日々が過ぎてゆくことに言い訳ばかりを探していた気がする。

思えば、そんな感覚は社会人になると忘れがちだということに気付かされた。そして、まさに大学を卒業して社会人になるときに味わった緊張感を今抱いている。それはもう青年ではない、ということ。若さという言い訳がもう通用しない。これからが本当に社会に出るということなのかもしれない。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに
暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十五章

スポーツと観光

サイクリング

東日本大震災発生後、全国でサイクリングをする人が増えたというが、決して新しい競技ではなく、古くから自転車で風を切り、そのスピードで景色を楽しむ人は多い。屋久島では特に春休み期間中には学生を中心に自転車で屋久島を訪れ、島を楽しむ姿を見かける。しかしながら、屋久島にはサイクリングロードがなく、また歩道がない地域も多いため、環境としてはまだまだ不十分にも見受けられる。それでも世界自然遺産登録地を走り抜ける屋久島独自のコースは屋久島の魅力を登山やトレッキングといったこれまでの観光からまた違った魅力を感じてもらえるものとして 2011 年よりサイクリング大会が行われるようになった。屋久島は一周道路が１００km ほどあり、制限時間を 11 時間としての観光オフシーズンに大会が行われているが、今年は 4 回目となり、大会の参加者もリピーターが増えているようだ。ちなみに、屋久島を一周するということは屋久島で育つ子供たちにとって、特に男の子が小学高学年のころにチャレンジするひとつのハードルとなっている。一周したことがある、というのは周りから一目置かれる存在になるようで、最近では単独でチャレンジする子供を見かけることはないが、集落毎に大人たちがサポートをして、みんなでチャレンジする行事となっているところもある。

オープンウォータースイミング

屋久島におけるマリンスポーツといえば、他の南国離島でも見られるように、ダイビングやシーカヤックなどが中心である。これらは登山やトレッキングと合わせて夏を中心に観光の一部として楽しまれることが多い。そんな中、2012 年にオープンウォータースイミング大会プレ大会が行われ、オリンピック金メダリストをゲストとして屋久島の子供たちに講演や、水泳の指導を行い、大会では 2.5km、5km、10km の本格的な競技の他、500m集団泳などを通じて屋久島の子供たちの水泳への興味を深めるなどしている。この大会は夏休みに入る前の週末を利用し、全国から参加者が集う。

トレイルランニング

2014 年、新たに始まった競技がトレイルランニング大会。屋久島では殆どのトレイルが国有林内の歩道として管理されている他、屋久島独自の深くて険しい森であること、主要なルートでは多くの登山者がいることなど、トレイルランニング大会の導入については、多くの問題点があった。そこで観光としてあまり利用されていないトレイルと国立公園内である永田いなか浜を含め、新たな屋久島の魅力を楽しめるコースを作り、初めての屋久島でのトレイルランニング大会が行われた。

新しい観光

５年前の屋久島にはなかったこれらの大会は、自然を楽しむ新たな視点から屋久島の魅力を発信しようとするもの、またゴールデンウィークや夏休みに集中している観光客の分散化、そして、それぞれの競技での屋久島の人々の競技人口の増加などがその目的とされている。

また、これらの大会の開催にあたり、観光従事者だけでなく、地元漁協や婦人会など地域の団体が観光に直接携わる機会が増えている。そうしたことにより、参加者は屋久島の人々と触れる機会が増える。これは現在の一般的な観光で屋久島を訪れる人々とはまた違う点でもある。

それぞれの季節の屋久島の魅力。それぞれの競技を通して見る屋久島の魅力。いくつもの視点から見る屋久島の魅力はこれからの屋久島の観光の多様化において重要な課題でもあるが、その魅力を感じた人が増えることにより、屋久島が世界自然遺産として後世に守り伝えてゆくための大きな意義を持つことになってゆくのかもしれない。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十六章
由来

■生物の名前

植物の名前を調べるとき、花や実の季節、葉や花の色や形状など、様々な視点からキーワードを探したり、既に自分の知っている植物に似ているところを探したりすることが多い。しかしながら、私はガイドの仕事をしていながら植物の分類は非常に苦手である。つまりは生物学的に、分類学的に、などと言った学問的な視野がどうやら苦手なのである。という言い訳を前提にするのも卑怯かもしれないが、それでも、その植物の名前の由来が明確であるものや、正に名は体を表しているものや日本の文化に関わりのある植物はゲストに対して説明もしやすい上、馴染みやすいために覚えてもらえることが多い。また私自身が納得して説明しているので、解かりやすく印象に残りやすいのかもしれない。

■名前の由来

図鑑などに載っている名前とは違うが、同じ植物のことをさす場合がある。それが地域ごとにある呼び名、方言名である。方言名にはその地域独自の風習や、気候などが背景にあるため、その名前からその地域での暮らしが見えてくる。

写真はシキミ。日本の文化にとても関わりのある植物で、仏事によく用いられる。このシキミにも、もちろん別称はいろいろあるのだが、最も肝心な名前の由来をひとつ例に挙げておきたい。名前の由来もいくつかの説があるが、私がいつも紹介しているのが、「悪しき実」。シキミの特性を最も表している「悪」が抜けてしまっており、最も有力な説ではないのかもしれないが、あえてこの説を紹介しているのは、シキミは花や実だけでなく葉も枝も根も全て有毒であるため。そして、その象徴的な実は植物で唯一の劇物に指定されているのである。ことを説明するためである。しかしながら、このシキミ、前述の通り古くから仏事に用いられており、よく知られた植物なのである。コウノキとも呼ばれているのは日本特有の香木であるとされているからとの説である。これだけの強い毒性がありながら、日本の文化において、古くから活用されているのは、むしろその毒性を活かした使用方法であると思われる。納棺の際にシキミの葉を敷くことで消臭効果があり、仏壇の花瓶に枝を入れることで、水の腐敗を防ぐ効果があり、また墓に供えることで、獣から荒らされるのを防いでいたとも言われている。このシキミ。屋久島では最も多くの登山者が訪れる森に、手の届くところに自生している。なんでも危険なものは排除・隔離するのが当たり前のように言われる今の日本社会において、机上だけでなく、自然を通じて文化を伝えていくことがどれだけ貴重な機会になってしまっているのかを私はいつもシキミの前で話している。ちなみにシキミとハッカクは分類上では近縁とのこと。確かに実は少し似ているのが、シキミは劇物、ハッカクには毒性がない。薬と毒は紙一重なのである。

■地域における呼び名

魚のように成長の過程において呼び名が変わるもの。大きさによって呼び名が変わるもの。そして、その地域ならではの呼び名。これらについては、その由来がとても明確であることが多く、また人々の暮らしとの関わりが見えてくる。

この写真はサクラツツジ。淡いピンクの花はサクラの花と同じ色をしていて、屋久島では４月のはじめにヤマザクラが咲く。山肌には常緑の濃い緑と新緑の鮮やかな緑や黄色の中に、ヤマザクラのピンクが彩りを添える。サクラが終わり、芽吹きがしっかりとしてきたころ、今度はこのサクラツツジが山々の中を縫うように流れる川のほとりに咲き始める。その情景を楽しむように屋久島ではサクラツツジのことをカワザクラと呼ぶ。山や海、川をいつも見ているから見えてくる景色であり、風や温度、湿度、目に見える色、新緑の匂い、全てを感じて生きてきた屋久島の人々の暮らしを、このような視点からも学ぶことが出来る。

まもなく梅雨入りをするであろう屋久島。雨が多い地域であるため、雨でも平気かと思われがちだが、梅雨は本当に辛い。夜に気温が下がらないため湿度があがり、羽アリが発生する。ちなみにこの時期の羽アリのことを流し虫と呼ぶ。新緑をうながす春の雨のことを木の芽流しと呼ぶが、こちらも雨が多い屋久島ならではの表現なのかもしれない。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

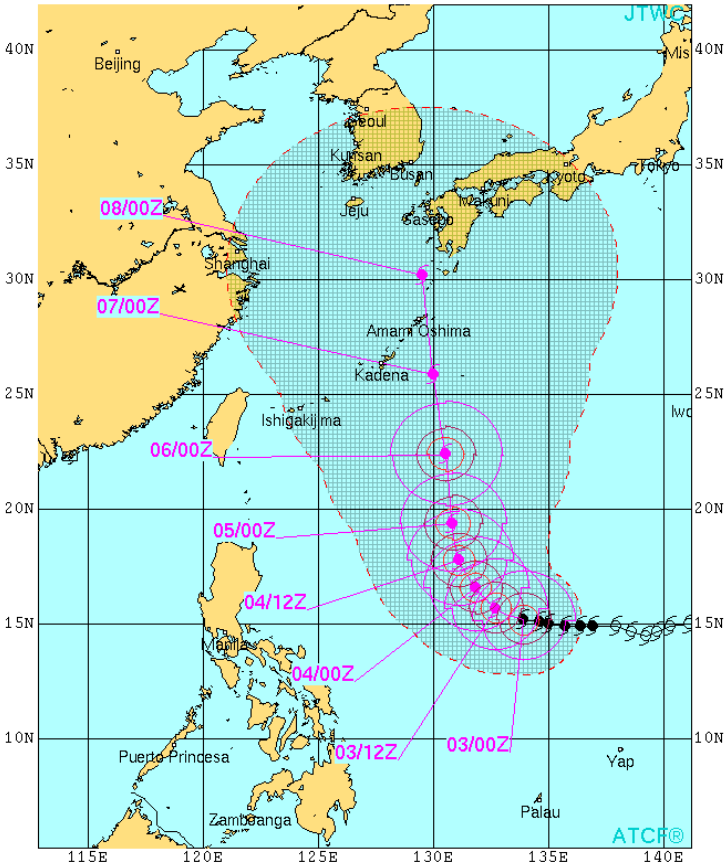
やくしまに暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

第十七章
天災と人災

■風の進む方向

　島で暮らすようになってから、風向きが重要なことだと初めて気付いた。ましてや円錐形のこの島では風向きによって、全く逆の天気になることがある。屋久島を一周すれば、晴れにも雨にも逢える、そう言われる所以はここにあるのだろう。また、台風の時には島の西側を通るのか、東側を通るのか、また島より北上するのか、その全ての違いが、台風通過後にもたらすものを大きく変える。




```
SUPER TYPHOON 11W (HALONG) WARNING #23
WTPN31 PGTW 030300
030000Z POSIT: NEAR 15.2N 133.9E
MOVING 280 DEGREES TRUE AT 07 KNOTS
MAXIMUM SIGNIFICANT WAVE HEIGHT: 44 FEET
03/00Z, WINDS 140 KTS, GUSTS TO 170 KTS
03/12Z, WINDS 140 KTS, GUSTS TO 170 KTS
04/00Z, WINDS 135 KTS, GUSTS TO 165 KTS
04/12Z, WINDS 135 KTS, GUSTS TO 165 KTS
05/00Z, WINDS 130 KTS, GUSTS TO 160 KTS
06/00Z, WINDS 120 KTS, GUSTS TO 145 KTS
07/00Z, WINDS 110 KTS, GUSTS TO 135 KTS
08/00Z, WINDS 100 KTS, GUSTS TO 125 KTS

CPA TO:                NM     DTG
KADENA_AB              113    07/05Z
CHINHAE                297    08/00Z
IWAKUNI                276    08/00Z
KUNSAN_AB              371    08/00Z
PUSAN                  294    08/00Z
SASEBO                 174    08/00Z
TAEGU                  344    08/00Z
```

○ LESS THAN 34 KNOTS
34-63 KNOTS
MORE THAN 63 KNOTS
PAST 6 HOURLY CYCLONE POSITS IN BLACK
FORECAST CYCLONE POSITS IN COLOR

■自然災害に備える

台風の通り道である屋久島で暮らしていると、台風に備えるための常識が身につく。例えば、台風が直撃でなかったとしても、数日前からフェリーが欠航することがあり、その場合は台風が通過するまでの数日間、荷物や郵便物が届くことはなく、スーパーの棚から食品がどんどん消えてゆく。

最初に牛乳やパンなどの日配品がなくなり、続いて野菜、肉類、と賞味期限の短い順番に店頭から品切れとなっていく。そしてまた強風で何か飛んできて、窓ガラスが割れてしまわないように雨戸を閉め、停電や断水にも備え、ランタンをいつでも使えるように準備し、風呂には水をためておく。水もペットボトルに入れておく。これが、台風が接近しているときの当り前の行動になる。自然災害に慣れるなんてことはないと思うが、備えることに妥協はしない。

そして、台風の暴風域に入る前には帰宅し、早めに風呂に入り、食事の用意もして、備える。停電にならなければ、ゆっくりとＤＶＤ鑑賞や、部屋飲みも楽しめるので、その準備も忘れない。そして、暴風域に入ると、例え雨漏りをしても、家からは出ない。暴風域にある状態で、どう確認しても台風が過ぎるまでは修繕不可能だし、そもそも大怪我をするだけ。停電にならなければ幸運で、停電になれば寝る。

■自然災害なのか

人災なのか

台風が過ぎると、私はまず自宅から一番近い海岸に向かう。台風の進路と勢力によって、海岸の地形や環境は大きく変わる。

今年の屋久島は予想通りと言われる台風の当たり年のようだ。予想通りというのは、植物なり動物なりがその前兆を知らせてくれていたからである。今年は７月に１回、８月に２回、台風の影響を受けている。結果、土砂崩れや倒木など、いくつかの被害は見られたものの、家屋などの被害や、怪我人などは出ていない。こうしてみると何事もなく無事だったと片付けられるのであるが、屋久島の砂浜にはこの時期、たくさんのウミガメの卵が埋まっており、この卵が台風により流出している。今年も甚大な被害が出た。これは天災なのだろうか。

かつての砂浜には、今よりもっと多くの砂があり、松の木が生え、植物の根が浜を支えてきた。台風が来て、ウミガメの卵がこんなにも流出することはなかったという。開発とともに埋め立て地が増え、そのために沖では海底から砂を運ぶ。山には砂防ダムが作られ、砂浜を形成する土砂が運ばれてこない。どんどん浜はやせていっている。台風は風向きによっては、むしろ砂を運んでくるところもある。本来は、こうして自然に砂が移動していくはずなのだ。高波によってさらわれ、海へと流れたり、砂浜を転がってしまった卵はもう孵ることはない。自然現象によって起きていることではあるが、これは自然災害ではなく、人災なのだ。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド
大野　睦

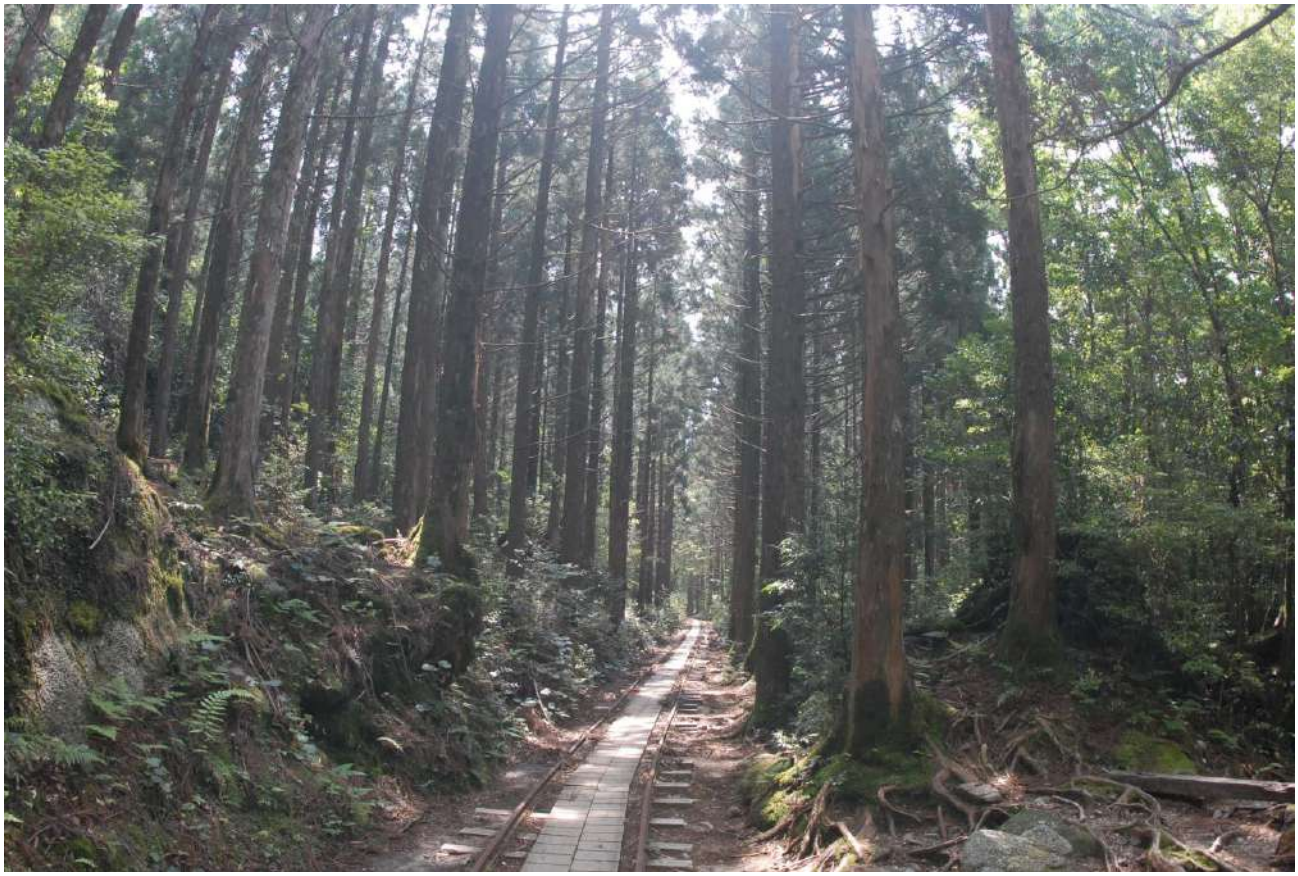
第十八章
世界遺産と観光

■観光振興

これまでにも述べてきたことだが、屋久島の経済の発展において観光産業の発展は世界自然遺産登録以降、右肩上がりに伸びてきていた。今も、ではない。この数年くらいを見てみると横波といったところであり、２０年かけて増えた観光客数はようやく落ち着いてきたようにも見える。それは、屋久島にとって観光産業を考えたとき、そろそろちょうど良いくらいの数字で落ち着くところにきたのではと私は考えている。屋久島は国の国有林伐採事業が終わり、これからの島の経済を考えたときに世界自然遺産登録があり、それを機に観光産業の発展を目指してきたのである。もちろん、それは全てが順風満帆であった訳ではない。世界遺産になれば観光客数が増える訳でもなく、その地域を保全するための方針や努力がなくてはならない。自然保護の観点からすれば観光客が増えることは望ましくないという意見も当然あっての今の屋久島がある。

■世界遺産登録は何のため

ここ近年の世界遺産登録に関するニュースや報道を見ていると、まるでオリンピックの誘致のようにも見える。まさにオリンピックと同じなら、各地から多くの人が訪れるようになるための準備は出来ているのだろうか。もちろん、世界遺産に登録されたからと言って観光客が増える訳ではないと考えている考える人も多いでしょう。でも、望むか望まないかは別として、世界遺産に登録されれば、当然その地を訪れる人は増える。その時に人が来ても、その地の人も訪れる人もどちらも困らないことが大前提である。そもそも世界遺産とは何なのか。「顕著な普遍的価値をもつもの」を後世に遺すためのもの。そこに観光産業との関係は密接になってきたのも近年のことなのでしょう。１９７３年に成立した世界遺産条約は、前年にアメリカで国立公園制度が生まれて１００年にあたる頃に始まっている。それから４０数年の歳月で世界遺産登録地は今年１０００件を超えた。それまでの歳月と、それからの歳月のスピード感があまりにも違うのは、まさに時代背景そのものを象徴しているように見える。



■世界遺産という冠

世界遺産登録が地域の魅力再発見＝観光産業の発展との期待を大きく掲げ、世界遺産登録を目指す自治体の動きをよく目にするようになってきた。そして、その反面住民は世界遺産になることが良いことなのか悪いことなのか、どうなのかわからないといった意見を持つ人が多いようにも感じる。海外ではどのように捉えられているのかわからないが、日本では世界遺産登録が観光客の増加に繋がるから、世界遺産登録を目指そうという狙いが大きくなってきている。そもそも、世界遺産に登録されれば観光客が増えるという方程式がどこにあるのか。

現在日本にある全ての世界遺産登録地の登録前とその後の観光客数の推移を見れば一目瞭然である。そして、世界遺産登録地でなくても素晴らしい観光地もたくさんある。そんな場所には、観光客を引き寄せる揺るがない魅力がある。世界遺産という冠だけで観光客が増える訳ではない。また観光客が増えるだろうとか増えたからと言って大きな施設を作ったり、大きなホテルチェーンの導入やコンビニやファーストフードが入ってくることを喜んで誘致しても、それがその地域の経済の発展に繋がるとは限らない。

かつて屋久島の観光客がまだ右肩上がりを続けていた頃、島に大きなホテルが２つ建設されるという話があがっていた。でもいつの間にかその話はなくなっていた。しばらくしてふと思い出して、ある人に尋ねてみたら、「そんなの出来てたら屋久島どうなっていると思う？ずっと続けてきた民宿も、今あるホテルも潰れるよね？」屋久島はこの世界遺産の冠にあぐらをかいてきた訳ではない。「顕著な普遍的価値あるもの」が失われないように努力を続けている。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/